ペンテコス講筵

聖霊降臨の現実

2003年6月15日（東京 新宿）

イエスはしばしば彼らに現れて

今日は新宿集会のペンテコステ集会です。ペンテコステといえば、いつも使徒行伝が読まれるわけです。私は使徒行伝はもちろん読みますけれども、ペンテコステを福音書の中からしっかり受けとっていきたいと思っている。とりあえずは、使徒行伝1章、2章の所のペンテコステに関わるところを先ず見てから、福音書の方に移りたいと思います。

先ず、使徒行伝1章では3節に、

「3**イエスは苦難（くるしみ）をうけしのち、**

と書かれており、即ちイエスが十字架に懸かってくれたことですが、

多くの慥（たしか）なる証（あかし）をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、

しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、

「しばしば彼らに現れて」という言葉は、福音書の中ではそんなに多く出てきません。ヨハネ伝では、「これが三度目である」と三回分しか出てませんし、その他の福音書でもそんなにしばしば出てませんけれども、ここでは「しばしば」とあります。

私は察するに、イエス・キリストがあの栄光の御姿をもって現れてくださるというのは、例えば外国の大統領がやって来て成田空港に降り立ったとか、その姿がテレビで放映されるなど、誰の目にも明らかという、そんな現れ方ではない。「肉」なる人の現れ方はそうですよ。「肉」なる人は東京におれば大阪にはおりませんし、大阪の人は東京へ来れば大阪は空っぽだというふうに、誰が見てもそう見えるわけです。

ところが、栄光の主キリストはそういう現れ方をなさらない。あのエマオの途上で弟子たちに現れているかと思うと、パッとエルサレムに現れたり、その現れ方は自由自在なんです。これが「霊なるキリスト」の神髄ですね。肉体をまとっておられた時は、あちこちに現れたいといくら思われても、ご自分が二つや三つに分かれることはできなかった。つまり肉体の制約を受けておられた。

それが栄光のお姿に変わられてからは、肉体のもつ相対的な次元の制約は全部取り払われていますから、必要に応じていつでも現れてこられる。しかも必要な人に現れてくださる。必要に応じて必要な人に現れてこられるから、「主イエスに出会った」という人を集めてみると、「しばしば現れて」という記事になる。客観的証拠は何もありませんから、

「イエスの復活はウソだ」

と言う人もいる。この世の現実的な証拠を探す方が間違っているわけです。高次の次元に入られたお方がその御姿をもって現れる時は、特に恵まれた人、選ばれた人、必要な人、そういう人にだけ現れてくださる。そして必要がなくなるとサッと姿をお隠しになる。そういうお方ですから。

主さまはいったん、「天に昇られた」とあります。姿が見えなくなった。弟子たちが見送っていたら、天に昇って行かれた。天使が現れて、

「ポカンと口を開けて見ているのではない。同じお姿でまた降りてこられる」

と、そういうところが使徒行伝に出てきます。それから、昇って行かれる前にイエスは、

「あなた方は祈って待っていなさい。聖霊を受けるから。聖霊を受けたら、あなた方は別人の如くなる」

ということを仰います。

4また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。5ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』

さらに、

「この火既に燃えたらんには、我何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり」

と。十字架に懸かるという血のバプテスマ、これを経なければ、どうしても聖霊を弟子たちに与えることができない。それをみごとに果して天に昇られる。昇られるにあたって、

「あなた方は祈って待っておれ。そしたら、日ならずして聖霊でバプテスマされる。聖霊を本当に受けるから」

と言い残して天に昇って行かれる。

……8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力(ちから)をうけん、而(しか)してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極(はて)にまで我が証人とならん』

と。弟子たちは、

「イスラエルの国を回復なさるのはいつですか?」

とか、くだらないことを聞きますね。こうしたことを見ても、既に弟子たちの思いとキリストの思いとがどれほどかけ離れているかがわかります。主さまの御思いは父、神さまの御思いと全く同じです。それだけなんです。神さまのお示しがなければ、何もなさらない。だから、キリストが一つ一つ仰ってくださることは全部、父なる神さまのお約束、裏づけがあることなんです。そうでないことは語っておられない。つまり必ず実現する、成就するという事柄を我々に語ってくださっています。そして、天に属する事柄ですから、もちろん「イスラエルの国をいつ復興するか」とか、そんなことではなかった。

「あなたたちにとって神さまとの関係において大事なことは、聖霊を受けることです。このお方がおいでになれば、あとはそのお方があなた方に必要なことは全部お示しになる」

と。地上におられたキリストは直接、父なる神からそれを受けておられましたから、ことごとく父なる神の御業が成就しました。イエスを通してなされる父の御業でした。今度は、イエスさまの御姿が見えなくなるわけですから、弟子たちそして、私たちも弟子たちの端くれとして、弟子たちの群れに加えてもらった一人として、

「ことごとくこの聖霊が、あなた方にすべきこと、語るべきことを、すべてお教えになる。だから、それに私はゆだねる」

と。それを受けとるわけです。

「4……『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。……8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、……地の極にまで我が証人とならん』

全世界にあなた方は証人となって証して行くんだよと。そこで、イエスは天に昇って行かれた。彼らはあと祈っていました。

……14この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管いのりを務めいたり。」（使徒行伝1・3〜14）

今まではしばしば現れられたけれども、これからは現れない。これからは御姿は見えない。

「聖霊が臨み給う。そのときを待て」

と。そう言われたら、これは祈らざるを得ませんね。約束の聖霊を受けるまでは祈らざるを得ません。だから、弟子たちは十日間祈っていたということです。

五旬節の霊風・霊火

使徒行伝の第2章を読みます。

「1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。

霊風、霊火ですね。一人ひとりの上にその火が止まって、もちろん、火事にはなりませんよ。出エジプトに書かれているように、シナイ山でモーセが燃えつきない柴を見た時もそうです、柴の木が燃えている。燃えているから見ようと思って行ったら、ちっとも木は燃え尽きない上に木は焼けない。しかし火は燃えている。そういう奇妙な現象をモーセが興味本位に見ていましたら、厳かな声が響いてきて、

「靴を脱げ、ここは聖なる場所である」

と言われて、モーセは平伏します。モーセが燃えつきない柴を見た時、徴として現れた火と

同じものです。

聖霊という生命の火が一人ひとりの上に止まった。それまでは、肉体のあるイエスさまを外側からを見ていました。かつては弟子として一緒に生活をした。内側のイエスさまは見えない。復活されたキリストが出てこられたら、これは前のイエスさまとは違う。次元が違う。

「ここにも傷の痕があるんだよ」

と言ってお見せになる。また、お魚を食べられた。そのお魚はどこに消えてしまうのかなと私は思うけれども。お魚までも霊化してしまう。とにかく、この世におられた時の肉体のあるイエスさまとは明らかに違うお方が目の前にいらっしゃる。それがしばしば現れたという。

そのお方は本当に内側に来られる。内に主がお宿りくださった。これがペンテコステなんです。これは本当に画期的なことですよ。今までは肉の〔肉体のある〕イエスさまを外から見ていました。ところが、霊のイエスさまを見ました。

「内にイエスが宿ってくださいました。そこで私は主さまと一つになりました」

と、これがペンテコステなんです。周りの人たちがびっくりするような形で、その現象は火が降ってきたという現象として、人々に明らかになった。居あわせた人々は「異言」を語りだした。物凄くイエスさまを讃美しているわけです。

「彼らは甘酒に酔っているんだ」

と言う人もいたと書いてある。けれども、語っている言葉はそれぞれ違う方言を語っていて、

あちらこちらからやって来た人たちはみな母国語を聞きとっている。居あわせた百何十人かが一斉に祈っているから、騒がしいのなんの、それは大変な騒がしさでしょうね。しかし、その騒がしい言葉の一つ一つが周りにいる人たちに分かるわけです。

「あっ、これはギリシャ語で神を讃えている。これはアラム語で神を讃えている」

と、わかるわけです。それでペテロが立ちあがって弁明を致します。それが2章14節です。

「14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々
および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ。
15今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16これは預
言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、
我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、
なんじらの老人は夢を見るべし。18その世に至りて、わが僕・婢女にわが霊を
注がん、彼らは預言すべし。19われ上は天に不思議を、下は地に徴をあらわさ
ん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20主の大なる顕著しき日のきたる前に、
日は闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん」（使徒行伝2・14〜21）

「主の御名を呼び頼む者」、その者に主は臨み給う、内に宿り給う。中に入ってくださる。終りの時に、末の世に臨み給うという。それは主イエスが十字架に懸かってくださり、我々

人間の罪を贖いきることによって全うされるわけです。十字架に懸かるというあの血のバプテスマ、罪の贖い、我々の全き贖いというものが成し遂げられるまでは、この聖なる神さまの霊は我々の中に降れないんです。降りたくても降れない。ところが、主さまが備えを全部してくださった。ヨハネ伝14章2節では、

「**処を備えに天に昇る。天にところを備えたら、またあなた方のところに帰ってくる**」

と、そういう言い方をしておられますけれども、実に私たちの中に主さまがところを備えてくださった。私たちの中にところを備え、その御業を終えて天に昇って、約束の聖霊を降してくださる。天にところを備えに行かれたはずなのが、私の中に場所をつくってくださった。

「贖いということによって、もうあなたはすっかりきれいになっている。用意が出来上がっている。だから、祈っていたら、降ってくるよ」

と。聖書に書いてあるように一つ一つ時を追って成就しました。十日間の祈り、そして集団で祈っていた時に目に見える形で火が降ってきました。これは我々人類に対するシンボル（象徴）ですね。この突破口が開かれたことによって、私たちは

「主さま！」

と御名を呼べば、主イエス・キリストが直ちに来てくださる。もう十日間は要らない。「主さま！」と本気で御名を呼べば、本当に十字架を受けとれば、ただちに聖霊は臨んでくださ

る。それが実現した記念日がペンテコステです。

だから、私たちの毎日毎日の祈りが実は質的にペンテコステなんです。「主さま！」と呼ぶ時に来てくださる。我々は主さまの霊によらなければ実質的に新しくはなれません。主さまが十字架に懸かってくださり、我々の罪や問題は片づけてくださった。けれども、

「十字架が片づけてくださった」

ということをいくら命題として覚えても、我々のうちに聖霊が宿って、

「そうだよ！」

と言ってくださらなければ、本ものにならない。主さまが内に宿って、「そうだよ」と言われて初めて、

「ああ、十字架というのは本当にありがたい。イエスさまが懸かってくださった十字架の有り難さがわかりました。ああ、主さま、本当に私のために罪を背負ってくださった。私のために天にところを備えていてくださるんですね。マタイ伝にある「山上の垂訓」で語っておられることは全部、本当だった。あれは本ものですよ！」

と。そういうことを全部、内側から

「然り、アーメン！」

と言わせるのが聖霊なんです。聖書の順序からいうと、「福音書があって、次に使徒行伝があって」となっていますが、我々からすると、ペンテコステを基本にして、そこから全体を

理解するんです。

この聖書の全体的な理解も結局そうです。聖霊がすべてを明らかにし給う。聖霊をいただいて、それから本当に聖書を読めるようになる。それまでは仮の理解です。でも、仮の理解がなかったら、我々は聖霊を受けることはできません。仮の理解でもしっかり勉強して、しっかり受けとると、今度は本ものにそれが切り替わる。仮の理解が仮でなくなるわけです。仮の理解だからといって、その勉強をしなかったら、本ものになりません。

例えば、私たちの恩師である小池辰雄先生は１９５０年に阿蘇山の麓で聖霊の決定的なバプテスマを受けるという物凄い体験をなさった。その後、霊的に一大飛躍されたわけですが、そこから過去の取り組みを振り返ってみた時にみんな生きているんですよ、それまでの歩みが。そうしたことが全部、聖霊によって活かされて、光を放ち出した。ですから、それまでの歩みは決して無駄ではない。先生は先生なりに苦しまれて、そのあとに決定的な聖霊体験をした。先生は私たちにとっては、ペンテコステを実際に体験して、使徒行伝の世界を我々の中に示してくださった方です。先生において主さまの霊が降ることが起こりましたので、私たちはそのあとスッと行けるわけです。

「私たちを見なさい」

使徒行伝の世界ではこういう烈しいペンテコステがあって、あとはもう弟子たちを通して

自在に御業が現れています。そして、弟子たちが按手すれば、もう直ちに聖霊が降るということが各地において異邦人の中に起きたり、いろんな所で起きています。

ペンテコステのあとで、弟子たちがやった最初の出来事が第３章に書かれています。生まれながら足の萎えた40歳ばかりの方――足の萎えたのは誰のせいでもありません、とにかく生まれながらに歩けないんですから――その人はどうして生きてきたかというと、「美しの門」の所に担がれてきて、そこに置かれて、お宮参りの人たちに施しを乞うて、それで生活していた。そして、ペテロとヨハネが通りかかった時に、

「1昼の三時、いのりの時に、ペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生れながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために、日々宮の美麗という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、

ペテロとヨハネがこういう行動に及んだのには、何か神さまの迫りがあったからだと思う。ペテロとヨハネの中に聖霊を降す力が漲っているということに――確かに聖霊のバプテスマを受けていましたけれども、自分の肉体的感覚で力に満ちているとか――そんなことを果して感じていたのか。それは私にはわかりません。けれども、何かペテロとヨハネに神さまの迫りがあったのだと思う。

「この人だよ、この人だよ！」

と。そこでその施しを乞う人と目が合う。じっと見つめて、「この人だよ」という神さまの迫りがあった。そして、

「私たちを見なさい」

と言った。

「はい、何かいただけるんでしょうか？」

と、きっと穴のあくほど見つめたんでしょう。そうしたら、

「私に金銀はないよ。でも、もっと凄いものを上げるから。イエス・キリストの名によって歩め！」

と、手を引っ張ったら、足の萎えた彼はたちどころに全身に力が漲って、生まれて初めて立ったという。大変なことが起こりました。これがいかに大変なことだったかということは、このことによってペテロとヨハネは引っ捕らえられて、宗教裁判を受けていることでもわかります。現代の我々は宗教裁判など受けたことはありませんけれども。

「これは大変なことだ。こんな大変な業を起こす人を生かしておいたら、ユダヤ教はつぶれてしまう。早く、小さな火のうちに消してしまえ、芽をつみとれ！」

ということが起こっているわけです。

6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』7すなわち右の手を執りて起ししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、

そしたらもう、その癒された人はうれしいですよ。

8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。

彼はペテロと一緒に祈るためにお宮に入って行った。

9民みな其の歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起りし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

11かくて彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、

このペテロとヨハネから離れたら大変だ、これは恩人だと思ってしがみついているわけです。

民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。12ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。』（使徒行伝3・1～12）

「己が能力と敬虔」によるものでもないし、「己が信仰」によるものでもない。つまり、足萎えが歩いたのは自分の信仰ではないと。

「ペテロ何者ぞ、ヨハネ何者ぞ、自分らの中には何も無いんだ。金銀もなし、力も

何もない。ただイエス・キリストという方が私の中に宿っておられるからである。その方から力が流れてくる。その方が、「癒えよ！」と仰ったら癒えるんだ。その方が「立て！」と仰ったら立てるんだ。」

と。「立て！」という御言(みことば)には力がこもっていますから、そして力が働いたら立ってしまうわけです。このペテロにとりすがった人は確かにペテロを信じたでしょう。

「この人はほかの人とちがう。この人は何かしてくださる」

と信じたのでしょう。そこで聖霊が働いたわけです。始めっからそっぽ向いている人には聖なる霊は働きません。やはり、「何かしていただける」という期待をこめてじっと見ている人に対してバーッと働く。そういうものなんですね。

聖霊のバプテスマ

だから、正しく向くことが大事です。我々は主さまに、十字架に懸かってくださった主さまに正しく向くことが大事です。我々人間の罪を贖い給うた主さま、そのお方が栄光の霊体をもってすっと現れてきて、迫ってきてくださっている。そういうふうに受けとるわけです。

「主さま、あなたの御贖いによって私は無者(むしゃ)にされました。ありがとうございます。いよいよ私の中に迫り宿ってください。聖霊のバプテスマがペンテコステで起こりました。あのような現象でなくて結構です。ただ内住してください。あなたが私の

中に宿って、あのペテロやヨハネのような姿にしてください。そして、どこへでもお遣(つか)わしください。あなたのお望みのままに私を用いてください。私はあなたに自分を捧げています」

と。そういう思いで、日毎に主さまに祈るんです。

「イエス・キリストの御名(みな)によってバプテスマを受けよ」

と、ペテロは勧めるけれども、何も水のバプテスマでなければならないわけではない。イエス・キリストという御名すなわち、イエス・キリストという霊的ご人格が、迫ってきてくださるその中に身を沈めることです。

「身を投げ入れろ。身を浸(ひた)せ、とっぷりその方に包まれろ。イエス・キリストという御名、その御名の中に自分がぶち込まれてしまえ」

と小池先生は言われる。

「バプテスマ」という用語は「バプタイズ」(baptize)「水に浸す」という意味です。すっかり水に浸して、もう水の上に体はありません。全部水に被われて、水漬(づ)け、聖霊漬けになります。御名の中に御名漬けになりますと、そうしたら聖霊に貫かれる。水のバプテスマから上ってきた時は別人となっているということを表している。水のバプテスマというのは、旧き己というものが葬られたというシンボルなんです。水から上ってくると、別人となって甦ってきた。新しい人間として生まれ変わってきた。それを表している。

私たちはイエス・キリストという、迫りきたり給う愛なるお方にとっぷり浸かります。温泉につかりますように、全身がこのイエス・キリストという霊なるお方の中にジワーッとつかりますと、そしたら、そのお方が我々のうちに内住してくださる。

「あなたは新しくなった。あなたは新しく生まれたよ」

ということなのです。

「人新たにうまれずば（神の国を見ることができない）、人は上から生まれなければ、霊から生まれなければ（神の国に入ることができない）。肉から生まれるものは肉のままだ。これではだめだ。人は上から、霊から生まれなければ」（ヨハネ3・3〜6）

という聖句がありましたね。

「ではいったい、霊から生まれるとはどういうことですか？」

とユダヤ人の指導者のニコデモは非常にあわてて尋ねました。キリストは、

「これは風が吹いているようなものだ。風がどこからくるのか誰も知らない。霊から生まれるというのもそうだ。私は霊なる風だ。私は霊風だ。霊なる火だ。それに浴すると、あなたは新しく生まれているよ」

と言われる。ペテロとヨハネに癒された人も、そんなことは予期もしていなかった。予期もしていなかったけれども、ペテロと正面で向き合った時に、じっと目を見た時にすっと力が

きたわけです、ペテロの言葉と共に。主さまは、

「あなたたちに聖霊を与えることが私のたっての願いだ。私はそのために地上に来た。何で天を離れて地に来たか。あなたたちを本当に神の子にするためだ。本当の神の子にするために、そして、福音が語られるため、御言が語られるために。幸いだよ、霊の貧しい者は。幸いだよ、悲しんでいる者は。幸いだよ、心の清き者は……」

と、マタイ伝で語られたけれども、人間はその御言をありがたく聞いても、それがなかなか自分のものにならない。妨げているものがある。憧れてはいても、それが自分のものにならない。素晴らしいものを見れば見るほど、こちらには嘆きだけが残るわけです。これを「月とスッポン」と申します（笑）。「天と地」はまるで違う。そういう嘆きしかない。

そういう嘆きを喜びに、死を生命に変えてくださる。その御業にはイエスさまが十字架に懸かり、我々の罪を贖うという血のバプテスマが必要であった。そのためイエスは苦しまれ、

「本当に十字架を受けなければならないですか？」

と、必死にゲッセマネの園で祈った。ただ御言を語り、御業をなし、按手をすることでは——病気は瞬間的に癒されますよ、しばらくは癒されますが、でもまたぶり返します。病死して四日も経っているラザロは甦らされましたが、結局ラザロはまた死にます、また病にもかかります——本当に質的に新しい次元に入るということはできないわけです。キリストがな

さったことはみな徴でしかありませんでした。イエスは、

「**十字架の血のバプテスマを通って、聖霊となってあなたたちの中に宿るならば、そしたらもう、たとえ肉体は滅びても、あなたは死んでも死なない生命をもらっていることになる。私は生命のパンである。生命のパンはモーセが与えたようなパンではない。モーセは肉体を養うパンを確かに与えただろう。けれども、私というパンは霊を与える、生命の霊を与える。肉体は朽ちても、朽ちない本当の生命を与える。これは私がこの世に与えるものである。そのために私はやって来た。そのために私は血のバプテスマを受けなければならない。それが成し遂げられるまでは、思い迫ることといかばかりであるか**」

と仰っています。それをみごとに果してくださった。

イエスさまは十字架に懸かることを「ノー」といつでも言えたんですよ、ご自分には十字架に懸かる何のいわれもないんですもの。十字架を背負わなければならないという、その原因はご自分の中に何もない。そうでしょ。

我々の中には確実にあります。我々は皆、十字架に懸かって当たり前のような生活をしたわけですから、神さまに対する関係では。まぁ十字架に懸からなければならないほどひどくなくても、とにかく天国へは行けない身である。陰府(よみ)が我々の行き先である。死というものがまちがいなくやってくる。土に還(かえ)るということが我々の定めである。霊が甦り、あるいは

霊体をいただいて神さまの御国に迎えられる、そんな原因は私たちの中には一つもありません。このことを本当に知ってないとだめですね。

「当然、私は天国へ行ける」

なんて言って、大きな面(つら)をしていたら、これはだめです。それはその死に定められた、陰府に定められた、その因縁(いんねん)因果、種、罪をイエスさまが十字架で片づけてくださったから、それはすっ飛んでしまって、もうないんです。

「死に行くべき原因はもうありません、審(さば)かれる原因はありません、全部きれいになくなっています」

ということ。

あの有名な「ベンハー」という映画に、そのことがよく描かれていますね。彼の癩病の母と妹がさーっと潔められたでしょ。外から見ても全然、病の痕かたもなく、全く新しくされたという場面が最後に出てくる。

〔註：映画「ベンハー」(Ben-Hur) は、１９５９年のアメリカ合衆国の叙事詩的映画。日本初公開は１９６０年。帝政ローマの時代に国を失ったユダヤに生まれた青年ベン・ハーが苛酷な運命に巻き込まれ、ある時は復讐に燃え、ある時は絶望に陥りながらも、神が為す業により再生されるまでの軌跡と、その遍歴において、姿を顕して道を照す救世主イエス・キリストを絡めて描く。キリストの生誕、受難、復活が物語の大きな背景となっている。……イエスの最期を見届けた彼

の心から復讐の炎は消えていた。あの雷雨の中で郊外の洞穴に退避した母と妹は、急な激痛の後に病が癒えて、元の健康な姿に戻っていた。彼は二人を抱きしめながら喜びを分かち合い、神の奇跡を知る。（ウィキペディアより）〕

それと一緒で、私たちは十字架の主さまを本当にいただいて、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と、それが告白となって出てくる時は、もうマイナス〔罪や咎（とが）〕の種はどこを捜してもないんですよ。そして、光がすーっと入ってくる、生命が流れてくる。そういうところに我々は入れられてしまっている。これは全部、神の御業（みわざ）なんです。神の御業であって、人の業ではありません。だから、人は何一つ誇ることはできない。

「私は十年間、キリストに仕えてきたから、聖霊をいただいたんだ」

なんて言うことはできない。それは十年仕えたかもしれないけれども、それが原因で聖霊がくるのではない。そのこととは全く無縁です。そのこととは全く無縁で、主さまが一方的にそれをくださる。どんな人にもくださる。十年仕えたということは、その後の働きのためには役に立ちます。その後の働きをする時に、自分が歩んできたひたむきな歩みというのは必ずプラスになりますけれども、それだから聖霊をくださったわけではありません。

霊なる人としてのトレーニング

今まで信者として特別なこともしないで突然、聖霊を受けた人はとまどいがありますよ。

「クリスチャンライフというのはどういうことなのだろうか？」

と、一つ一つそこから教えてもらって、歩み出さなければなりません。聖霊を受けた途端に天国人になるわけではありませんから、やっぱりトレーニングを経ないといけない。霊なる人としてのトレーニングがそこから始まります。

なぜかというと、私たちは「肉」なる人でありますから、神さまの目から見たときに、私たちは死に定められる、罪に定められる因縁因果で――それは〔イエスさまが十字架に懸かってくださったことにより〕全部洗い流されていますけれども――肉体を宿としている限りは、必ず戦いがあり、衝突があります。「霊」なる思いと「肉」なる思いが絶えずぶつかり合います。

聖霊を受けた人というのは、霊なる働きが強い。聖霊というお方が絶えず目を天へ向けさせるんです。聖霊の本国は天国ですから。我々「肉」なる人の本国は「地」ですから絶えず「地」のことを思う。でもやっぱり、神さまは人間に「永遠」を思う心も授けてくださった。そうなんです。我々の思いは「地」の、この世のことを第一にする方が強くて、「天」〔天界、天国〕に対する憧れはかすかだったのが、逆転して、向こう〔天〕に対する思いが強くなり、こっち〔地〕に対する思いは光を失っているというか、無力化されている。私はそうだと思う。本当に向こうとの結び付きの思いが強くなって、この地上のものは光を失ってしまう。聖霊

を受けた人に対してこの世の宝は誘惑にならないんですね。

「世の宝がどうしたの？」

と、それまでの生まれながらの性質をもつ自分だったら言えない。

「宝、それはいいですね」

と、きっとそうなってしまうと思う。

「世の宝、それがどうしたの？　この世の栄光、それがどうしたの？　この世の地位、それがどうしたの？」

と、この世のものに目もくれなくなる。「キリストには代えられません」という聖歌がありますね。それは聖霊があのように歌わせるんです。

〔註：聖歌521「キリストには代えられません」

1キリストには代えられません。世の宝もまた富も。このおかたが私に代って死んだゆえです。

（おりかえし）世の楽しみよ去れ、世の誉れよ行け、キリストには代えられません、世のなにものも。

2キリストには代えられません。有名な人になることも。人のほめる言葉もこの心をひきません。

3キリストには代えられません。いかに美しいものも。このおかたで心の満たされてある今は。〕

小池先生は、

「聖霊の他には何もない。聖霊に換えられるものは何もない」

と言われた。でも、小池先生は、「肉なる人」〔この世の人間〕としてはいろいろ憧れを持って

おられたと思います。負けず嫌いだから、何でもできないと悔しがられる先生だろうし、地位だって名誉だってみんな欲しかったお方だと思うんですよ。でも、聖霊を受けてしまわれてからは、「そんなものは、それが何だよ」ということになったと思う。私にはそうとしか思えない。「一高東大に入りたかった」とあれだけ言っておられるのは、私らからみたら「肉」〔人間的な思いが人一倍あったから〕ですよ、それは（笑）。やっぱりこの世的なものがあったと思うんですよ、名門小池家でありますから。ところが、聖霊を受けてからは、

「聖霊に代わるものは何もない」

と言われた。それでも時々、ちょろっ、ちょろっと「肉なる」人がもたげますけれども。だから、

「人間小池を見るな」

と仰ったのではありませんか。そんなものが百％なくなったら、「人間小池を見るな」なんて言わないで、

「人間小池はもういない。聖霊の小池だけがいるよ」

と仰れるはずだけれども、やっぱり人間小池の部分が残りましたものね。だから、

「そんなものは見ないでくれよ」

と先生は仰ったわけですから。

「はい、見ません。小池のバカヤローなんかは見ませんよ」

といって、言い返したらいいんですよ（笑）。

天国がわが本国

そういうことで、聖霊を受けるということは、天国がわが本国であり、

「わが国籍は天にあり」

と。そこにキリストがいらっしゃる。やがて時が来れば、キリストが現れて来られる。

「その時、我々は同じ御姿に化せられる」

と、ピリピ書に書かれています。ピリピ書3章、それからコロサイ書、そういったパウロが晩年に書いた書簡では、キリストが天から間近に来てくださる。その時、我々は同じ御姿に化せられる。ところが、現実に周りを見渡せば、この地に属する〔この世のことを第一に考える〕人たちがたくさんいて、地の思いに囚われている。彼らの思いは地のものだということをピリピ書では、

「19彼らの終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。

という言葉で表しています。そういう人たちがキリストの十字架に敵対して歩んでいる。キリストの十字架に敵対して歩む者は、どういう内面かというと、「己が腹を〔己自身を〕神となし、己が恥を〔神さまから見たら恥と思えるものを〕自分の光栄となして威張っている。そして、

ただ地のことのみを思う」という。

20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。」（ピリピ3・19〜21）

と。だから、

「我々はこの肉体のままで栄光の姿に変えられる」

と、そこまでパウロは言ってくれているんです。

「既にこの世を去った人、眠った人、その人はラッパが鳴り響いたら瞬間に栄光の体に化せられる。生きている我らはこのままで栄光の姿に化せられる」

と。「もう今にもキリストは来られる」と、そう思っていた。

「その迫る思いというものを質的に我々も同じように持ち続けようではないか」

と、小池先生は呼びかけている。だから、「終末的実存者」「終末的天国人」というふうに、「終末」ということを強調しておられる。パウロにおけるような御国の迫り、キリストの迫りを感じていたわけです。キリストもあの山上で変貌された時に、

「私が再び現れる時まで、あなた方の中に死なない者がいるよ」

ということを仰った。そのくらいキリストも御国の迫りを感じておられた。そして、パウロも感じていた。それから年月は二千年経ちましたけれども、

「質的にはその迫りはいよいよ強くなってきていることをしっかり受けとれよ」

というのが先生の我々に対する語りかけなんです。あの『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻、1982年刊）などの著作や聖書講筵で言っています。そして、「ペテロの手紙」の中で、

「神さまがその時を延ばしておられるのは、一人でも多くの人に救われて欲しいということで、時を延ばしておられる。神さまにとっては、一日は千年の如く、また千年は一日のようだ」

と、ペテロは言ってます。キリストが天に召されてからペテロが生きている時までそんなに経ってないのに、ペテロはそういう言い方をしています。

私どもは「肉なる人」として、この「地」に生きています。だから、この地の法則を受けいれなければなりません。御飯の準備もしなければいけません。身体も大事にしなければいけません。「肉なる人」としては、この「肉」の法則に従って体を大事にするということは大事です。

けれども、「霊なる人」としては、それに勝って本当に主さまとの繋がり、結び付きを太く太くして、霊なる人が肉なる人をコントロールしていくような生き方をしていく。そして、今まで地の宝と思った物には見向きもしませんと。それから、いわゆるこの世の放縦とか、情欲とか、そういったさまざまなこの世の人たちが当たりまえと思っていること、我々はそういうものとは縁を切っています。

ただ、私たちは肉体に在るものとして、肉体の法則に従って、身体を大切にしていく。これを粗末にしては申し訳ないよということです。それは、

「この肉体に留まってこの地上で神の栄光を現せ」

という命を私たちは受けているからなんです。

「地上に留まって、そこで神の証人として御名の栄光を現せ」

と。ヨハネ伝17章のところにありますね。

「私は御許に参ります。彼らはこの世に残ります。だから、彼らをこの世にあって護ってやってください」

と、イエスはそう祈ってくださっています。

健全なる福音

この世にはたくさんの宗教や宗派がありますが、非常に危ない点、過ちは、ある宗教は「天だ、天のことが一番大事だ」と言って、この地上のことを全く無視してしまう。その無視の仕方が、肉体を粗末にして早死にするという形の無視なら、迷惑はそれほどこの世にかからないけれども、

「この地なんていうのは禄でもないものだ。この地におる者なんか大したことない。殺せ、殺せ」

といって殺してしまう。「オウム真理教」なんかもその一つではないかと思う。果ては、
「殺すことによって彼らは救われるんだ。殺すことは彼らを救ってやることだ」
なんてことを主張する。「そうですか、そうします！」と指導者に従い、猛毒サリンを撒(ま)くわけです。天の次元と地の次元を、ああいうふうに受けとって、
「この地の奴は殺してやらなければ救われないんだよ」
と言ったら大変なことになります。でも、その種の宗教、宗派が他にも出てくると思います。
だから、天の秩序と地の秩序が神さまの聖旨(みむね)の中で繋がっているということをしっかり受けとることが大事です。この地上は肉の人の訓練の場だと。一足飛びに天の人に我々は成れない。この地上で生を受け、ここでトレーニングを受けて、そして備えが終った時に向こうの世界へ導かれる。その順序を間違えてはいけないんですね。その意味で「健全なる福音」を受けとることが大事です。
パウロの書簡についても、
「結婚するなと言ってみたり、食物を取ってはいけないと言ってみたり、情欲、結婚などのいわゆる性的なものは全部断ち切れとか、いろんなことを言う者がいる。いかにもそれが崇高なことであるかのように言っている者がいるけれども、我々の情欲を断ち切ったところで、何の役にも立たない。そう言う者に惑わされるな」
とパウロはコロサイ書に書いています。ですから、小池先生はよく、

「パウロ書簡はしっかり読みなさいよ」
ということを言っておられた。なぜかというと、パウロ書簡は現実のこの世の生活を健全に営むために、我々に必要な智慧を与えてくれているからです。方向を示してくれる。でも、
「パウロ書簡においては、結婚に対してあまり積極的に書かれてはいないですよ」
と言う人がおるかも知れない。
「乙女よ、結婚するな」
とか（笑）。その理由は、パウロは
「もう明日にも御国が来る」
と思っているから。明日でなくても、本当に近いうちに来ると思っている。
「乙女たちよ、あなたが結婚して、旦那に苦しめられ、縛られて、仕えて、そっちへばかり気が向いて、主さまのことを思えなくなる。そんな不幸な目に私は合わせたくない。だから、ひたすら主さまを待っていなさい。その方が得だよ」
ということなんです。決して「結婚というものはよろしくない」と言っているのではない。コリント書簡を書いた時には、そのように彼は思っていた。一般的に言いましたならば、決してそんなことは言ってない。むしろ、
「この世の結婚というものは、天国のキリストと花嫁である我々の、その結びを表わすようなものである」

という言い方をしています。「夫は頭で妻は体」というふうな言い方をしまして、

「頭はキリスト、体は教会。そのように夫は体である妻のために生命を投げ出せ。キリストがエクレシヤのために生命を棄てられたように、体である妻を愛する愛というのは命懸けでなくてはいかん。俺は頭だと言って威張りくさっているのは、全然そんなものは御意ではない」

ということをエペソ書簡に書いているわけです。

パウロ書簡の受けとり方も、平面的、機械的、部分的にそこだけ受けとって、それに惑わされてはいけないわけです。その意味で、きちんと正しく指導してくれる人というのがどの集まりにも必ず要ります。指導者が変な方向へ導いて行ったら、みんなが谷底へ落ちますからね。だから、正しい指導者のもとで正しい指導を受けて、健全に歩んで行くということが必要かつ非常に大事です。

私はキリストに導かれてよかったと思っています。また時至って、小池先生に出会うことができたのは本当によかったと思っています。これからは、皆さま方が小池先生に出会い、そしてまた私に出会ってよかったと思ってくだされば、本当にうれしい。人数が少人数であろうと、自分たちが本当の大道を、健全なる道を示されたと感じてくれたら、それでよいと思う。それをまた次の世代に伝えていきたいと本当に思ってくださるならば、なおうれしいわけです。それを成就してくださるのが聖霊なんです。すべては聖霊から始まる。

使徒行伝を取り上げるのはこの程度にしますが、今日私が話した以上に詳しく理解したい方は、どうぞ、使徒行伝をご自分の目でお読みになってください。ペテロとヨハネを通して、どんなに素晴らしいことがそこに成就しているか。当時の初代の信者たちがどんなに燃えていたか。そういうことが使徒行伝の3章、4章、5章あたりをお読みになったらよくわかります。それから、福音が異邦人に伝えられていく異邦人伝道の姿、最初の殉教者ステパノのことが出てきます。もちろん、パウロの熱心な伝道のことも出てきます。それから、コルネリオのことなんかが出てきます。そのあたりのところも、ご自分で読んでいただくことにしまして、次に福音書へ入っていきます。

神がキリストにビジョンを示される

福音書ではヨハネ伝を取り上げます。ヨハネ伝で結論的な部分が書かれているところは14章ですね。14章9節から読みます。

「9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。』」（ヨハネ14・9～10）

このことについては5章にも同じようなことが書かれていますので、先ず5章を見てください。38年間、病に苦しんでいた方をイエスは安息日に癒された。その時の問答です。「安息日に癒しを行った」というので当時の宗教家やユダヤ人に責められたわけです。

「17**イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』**

と。この38年間、病に苦しんでいた人が癒されたのは、「父が働かれたからだ。私ではない」と言っておられる。

「8**イエス言い給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。**」

と9節にありました。

「**それは父の御業であって、私ではない。たとえ私であるとしても、それは私を通して父が働いておられる**」

ということをキリストは答えられた。それでいよいよユダヤ人たちは怒りだした。

18**此に出りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父と言いて、己を神と等しき者になし給いし故なり。**

神さまがイエスの中に百%宿ってしまったのだから、イエスの答は仕方がない。

自分が神に成り代わって、「俺は神である。さぁ、みんな俺を拝め！」と言って、人間がひとりでに神に成ったと思うのは傲慢であり、イエスの場合とは違う。イエスはゼロです。

平伏していたイエスの中に神さまがおりてきて宿られ、

「さぁ、私の業をお前はするんだ。私の言葉を語るんだ」

と、神さまが迫ってきて、イエスを通していろんなことをなさっている。イエスの責任ではありませんから。それは拒めないですよ、イエスさまは。

19**イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、**

「ここのところはどういう意味かな？」と、かねがね私は考えていました。今理解するところでは、神さまはイエスさまにあらかじめビジョン（異象）を示されるのではないかと思うんです。たとえば、そこに寝ている人がいたとします。その人が按手されてすっと起き上がって跳びはねるような、そういうビジョンをあらかじめ示されるのではないかと思う。それは父の御業で、神さまがそういうことをなさっている姿を、キリストにあらかじめ示されていると思う。キリストは同じようになさる。そしてその通りに成っていく。御言だって、先に神さまが語るべき御言をお示しになる。その通りのことをキリストは仰る。

「**わが語りし言は父の御言なり**」

と。そういうふうに、神さまはことごとくキリストの中に先にいろんなことをお示しになっ

て、その通りなぞらえてなさっている。お習字の時に点々点々となっているところをなぞらえて書くように。先に御業、御言をお示しになっている。

病死して四日もたつラザロを甦らせた時もそうだったと思う。遠くにいらっしゃるイエスさまにラザロの甦りのビジョンをあらかじめ与えて、

「さぁ、お前は今からラザロの所へ行って、甦りをやるんだよ」

と。それで、キリストはラザロの所に行かれて、そして祈られた。

「あなたは全てをお示しになりました。また、私が祈ることをことごとく聴いてくださいました。この世の人たちにわからせるために、今、御業をなさってください。既にお示しになった御業をここでなさってください」

と言って祈られたと思う。つまりイエスは我意で、勝手気ままに、気まぐれで何かなさるようなお方では絶対にないと思います。

そのくらい父なる神さまとイエスさまとの結びつき、密着度は強かった。父は御子の中に百%内住しておられ、御子は父の懐に百%抱かれている関係がずーっと続いていた。その関係が分離されそうになったのがゲッセマネの祈りでしょ。つまり、十字架に懸かる前夜に

「本当に十字架を受けなければならないんですか？」

とイエスは必死に祈られた。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし。どうして、こんなことに？」

と。ゲッセマネの園で祈っていた時、イエスは十字架に懸かることをあらかじめ示されて、

「これしかないんでしたら、お受けいたします」

と言われたと思う。それが本当に現実になったのが、イエスが十字架に懸かり、我々人類の罪を贖いきったという贖罪死でしょ。それで思わず、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というお言葉が突いて出たと私は受けとった。小池先生は、

「これは義の叫びだ。百%神さまと一体となっている人が棄てられてたまるものですかという、プロテストとしての叫びだ」

というふうに言われたけれども。地上にいらっしゃったイエスさまは本当に父と一つで分離しがたいものだと思う。しかもご自分の自覚では、

「自分は空っぽだ。私ではない、善き方は父のみだ」

と仰るくらいに空っぽなお方で、そして、父に栄光を帰しておられる。だから、御業は、

19……子は父のなし給うことを見て行うほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。

と。人間の子どもさんだって、そうする。小さい子どもというのは親のするとおりのことをするみたいですね。本当にそっくりなことをするという、そういうことを聞きますが。

また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21父の死にし者を起して活し給うごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。22父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は、之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。25誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27また人の子たるに因りて、審判する権を与え給いしなり。28汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29善をなしし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。30我みずから何事もなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・8〜30）

キリストと同じ姿に変わる

それからもう少し前へさかのぼりまして、3章31節のところです。

「31上より来るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上にあり。32彼その見しところ聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。33その証を受くる者は、印して神を真なりとす。34神の遣し給いし者は神の言をかたる、

イエスさまのことですね。

神、御霊を賜いて量りなければなり。35父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。

万物の運命は御子の手中にあると。だからもしも、キリスト・イエスさまが

「もう嫌になりました。この地には愛想が尽きました。もう嫌になりましたから、私は御許に帰ります」

と言って、さーっと天へ帰ってしまわれたら、もう終りだったんです。万物はイエスさまの御手の中にあったから、イエスさまが「もう嫌っ！」と言ったら終りだった。それなのに十字架の死〔十字架に懸かり我々人類の罪を贖いきったという贖罪死〕に至るまで、マイナス〔罪や咎〕を全部ひっかぶって、イエスさまは万物に生命を与えた。

そんなことをなされる方はイエス・キリストの他に私は知らない。他にそういう方がいらっしゃれば、そちらへ行って、その方を信仰なさったらいいけれども。私にとってはイエス・キリスト、そのお方を正面に見て、そのお方の中に埋没していくしか生命はない。そのお方

の中に埋没するのであって、お墓の中に埋没するのではありません。この地の中に埋没するのではありません。キリストなる光の中に自分を入れる。そしたら、光に貫かれる。

「わが言は霊なり生命なり」

という。

36御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒その上に止まるなり。（ヨハネ3・31〜36）

「御子を信ずる」というのは、御子を受けとって、御子と一つに合体させていただくことです。このことは聖霊がそうさせてくださる。「聖霊を受けとる者は」というふうに読み替えていただいていい。聖霊において御子と一つになれるんですから、聖霊は御子キリストの分身、分霊です。天界の霊なるキリストがご自分の霊を助主、聖霊として我々一人ひとりに与えてくださっている。それが聖霊という姿の御子キリストです。

だから、それを受けとる者はもう「永遠の生命」にならざるを得ません。また、その人は愛の人ならざるを得ません。御子の霊は愛の霊ですから。その御子の霊が神さまの御思いにかなうような生活へと我々を導いてくださるんです。その導きに従っていますと、いつのまにかモーセの十誡〔モーセが授かったとされる十箇条の戒律〕も全部成就される。「すべし、すべからず」の戒律は全部、聖霊がちゃんと成就していてくださる。そうなんです。

「戒めを守ったら聖霊がくる」

のではなくて、

「聖霊を受けた人は戒めを守らざるを得ない」

んです。キリストの霊を受けた人はキリストの言葉を大事にします。また、キリストにあるお方を愛します。そのことは何よりも尊いと思います。よく、女の方は言いますね、

「あんたは私の子だよ、お母ちゃんがお腹を痛めて産んだ子だ。だから、あんたはそんなことは絶対にしないよ」

と。なにか「お腹を痛めた」ということで、すっごいことを——我々父親からみたら、うらやましいようなことを——お母さんは言うんです（笑）。強いなぁと思う。へその緒で結ばれて、「本当に分身だよ」という言い方をしています。

それと同じようにキリストさまは、

「あなたは、私がお腹を痛めて産んだ子どもだよ」

とキリストは言ってくださる。十字架でご自身の御体を痛めて、審判を受けて、

「あなたを清め、新しく産み出したんだよ。霊によって産み出した。お腹を痛めたんだよ」

とキリストに言っていただいたなら、我々は本当に心強いでしょ。つまり、キリストが、

「私が責任を持つよ。私の創造の業は終らないよ、あなたが本当に私と同じ姿に変わるまでは」

と仰ってくださる。

「**栄光の御姿に形作ってくださる**」

というピリピ書の約束の言葉が成就するまでは、今に至るまで働き給う。これからも働き給うんです。御業は終らない。疲れ給うことはない。無限無量なんですよ、神さまの世界というものは。だから、

「**走れどもつかれず、歩めども倦まざるべし**」（イザヤ40・31）

というのは、イエス御自身のことかもわかりませんね。キリストの御働きというものは止まるところがない。永遠に御業を続け給う。

「**昨日も今日も変り給うことなし。今日も明日も次の日も進み行くなり**」（ルカ13・33）

と。さまざまな御業を我々の中でなしとげて、我々一人ひとりを小さきキリストとして用い給う。そして、闇の世を光に化そうとして、働きを続け給う。

そういうイエスの働きと同質の働きをするものに我々は変えられた。これが我々の人生の喜びであり、人生を生きる意義です。単に私が天国人として天国へ行かしてもらうようになることだけではない。その前にこの地上でいろいろな働きをしないといけない。向こうへ行けば、もっともっといろいろな働きをするでしょう。

なんといっても、地上の人たちに福音のことを語り得るのは我々人間なんですよ。イエス

さまはなぜ肉の姿をとって来られたかというと、我々と言葉が通じるためですよね。いきなり天の次元の霊なる神さまが、エホバの神さまがうわーっと語っても、それは雷が鳴っているのと一緒です。言葉として聞こえないですから、理解できない。

わずかに選ばれたモーセ〔旧約聖書に書かれている古代イスラエル民族の指導者〕なんかが神の声を聴こうとしたら、恐ろしい光景に出会ったというわけでしょ、シナイ山の上で。しかも、旧約聖書では「神を見た者は死ぬ」と言われていた。

「**聖なる神さまに、肉なる人間が出会ったら、人間は焼き尽くされて死んでしまう。だから、みだりに神の名を称えるな**」

と言う。だから、「主さま」「アドナイ」と言っていたのが、「エホバ」の呼称に変っていったということです。そのくらい凄いお方ですから、霊なる「ヤハウェー」という名前で呼ばれている神さまがどんなに愛の方で、

「**我は有りて在るもの、有りて在らしめるものである**」

と仰っても、直接的には我々人間とは繋がらなかった。ところが、イエスさまは人間の姿で我々の所に降りてきて、問答して、弟子たちと一緒に暮らして、貧しい者たちの所へ行って病める者を癒して、人として素晴らしい姿で我々と関わりを持ってくださった。そしてその最後は十字架だった。そういうふうにして、我々と縁を結んでくださった。

「今度は、あなたたちが――まだ福音に目覚めていない多くの人たちがいる――そ

の人たちをも救わねばならない。その人たちをも神の子に変えなければならない。それをやってくれるのがあなたたち一人ひとりだよ」

というのがペンテコステ（聖霊降臨）ですよね。

「聖霊を受けてくれ。聖霊を受けよ！」

というわけです。

御業を行うこと、これ食物なり

次は4章にいきましょう。ヨハネ伝はあちらこちらで取り上げます。

「13イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。14されど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

聖霊をいただいたからといって、喉が渇かないなんてことはありえません。肉体の渇きというのは、「ヤコブの井戸の水」でいやしてもらうしかないわけです。けれども、

「内的な渇き、魂、霊の渇きをいやすのは、ヤコブの井戸ではだめだ。これは私が与える水だ。これは聖霊だよ。この聖霊というものをいただいたら、あなた方の中の霊なる渇きは止まってしまう。いや、のみならず、内側から湧き出てきて、それを他の人々に流して行くことになるから、あなた独りの問題ではない。あなたの中

から湧き出る、それが大事だよ」

と。それから、礼拝のことがそのあとに書かれています。

「この山でもあの山でもない。どこでもいい、いずこにても。家庭の中でも、この集会所でも、どこででも神を礼拝できる。真の礼拝は霊と真をもってする礼拝。真心こめて、「主さま！」と祈るその祈りが礼拝だ。礼拝とは、私を受けとるのが礼拝だ。私を受けとりなさい。そして、私から使命をいただきなさい。新しく力をいただきなさい。そして働きなさい。その原動力をいただくのが礼拝だよ」

と。だいたい、私たちは神さまに何かをお返しするなんていうことはできない。神さまにお水を差し上げたって、飲んでいただけないですものね。霊なる神さまに水を差し上げても、飲んでいただけない。私たちは一方的に、霊なるキリストさまから生命をいただき、霊をいただき、力をいただき、そして御言をいただき、使命を授かっている。それを日毎に実行していく。これが礼拝だよと。

日曜日には我々兄弟姉妹は召団として使命をいただき、召団としての御業を現すために一所に集います。これはとても大事なことです。と同時に、ウィークデイには我々一人ひとりが主さまから日々生命をいただいて新しく歩んで行く。ちょうど毎日御飯を食べるように、毎日、御言・御霊をいただく。

ただ、これは霊の糧をいただくことで、霊の交わりですから、時間の長短は問題にならな

い。1時間やったから充分かというと、そうもいかない。瞬間でもいい。場所もどこだっていい。新幹線の中でもいいし、電車の中でもいい。とにかく、目をつむればそこは密室で主さまに出会える。我々はこの世に体を置いていながら、霊はいつもこの世ならざるところにつながっている。そこにいつでも帰って行けるわけですから、これはありがたいことです。

これはある意味では二重生活です。このヨハネ伝でいいますと、「天と地」、「上と下」。神さまのご臨在し給う「神の国、天の次元」とそれに対して「世、肉」なる人間。こういう対比的な言葉によって示されています。特にヨハネ伝3章では、

「上より来るものは、すべてのものの上にあり」

と。「上・下」とか、「天から来るもの・地に属するもの」といった表現もしています。終りのほうでは、この「世」というのがたくさん出てくる。

「[24]神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」（ヨハネ4・24）

というのがあります。それから、もう少し先へ行きますと、食物のことが出てきます。弟子たちは食物を買ってきた。ところが、イエスは何と仰ったか。

「[34]イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり』」（ヨハネ4・34）

ここまで言えるのはイエスの凄さですね、「是わが食物」、「霊なる食物」〔御意を行い御業をなすことが自分の食物〕だと。肉体の食物はもちろん別ですけれども、霊なる食物は、先ず私

たちはイエスから霊をいただくことから始まります。いただくことから始まって、「御業を行う」ことがまた霊の食物になっていく。御業を行うことによっていよいよその霊が鍛えられ、成長していく。成長のための糧は何かというと、働くことだという。

「御業を行うこと、これ食物なり」

と。だから、出発点は霊をいただくことです。先ずいただくだけいただいて、それで満たされたら、次に働く。働くことがまた次の食物となって、いよいよその人は成長していくという。ですから、祈ることも働くことも一つなんですね。この働くことについても

「[34]……御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり」

とあります。御意の内容は一人ひとりにおいて、みな具体的な業は違うはずです。一人ひとりにおいて御意が成っていく。御言に専従する人は、それがその人の「御意を行う」というわけですし、どれが上でどれが下ではない。大事なのは、御意を行っているか、我意を立てていないかにある。

「いや、私にはあっちのほうが派手に見えていい。あっちに変えてください」

なんて、そんなことを言ってはだめです。スミレはスミレ、バラはバラ、みなそれぞれが花咲かないといけない。

「私はあの方のようになりたいんです」

と、すぐ人をうらやんだりする。これはよろしくないですね。

「私はあなたにこれを望む」

と言われたら、

「はいっ」

と言えばいいんですよ。我々が悩むべきことは、

「これは本当に御意なんだろうか。こういうことを今やっているのは、御意なんだろうか？」

ということ。それでわからなくて悩むということがよくありますね。私は申し上げたい。今、置かれている場、それは先ず御意だと思って受けとってください。それを変える時には、変えるだけの神さまからの迫りがあるはずです。

「嫌になったから変わります」

これが一番いけない。

「段々空しくなってきたから変わります」

というのもいけない。今置かれている場で祈りをもって精一杯やる。そして、次のところに変わるべき時には、主さまの方できちんとサインを送り、そのように導いてくださいます。きっとそうです。ですから、疑わず、つぶやかず、ためらわず、今置かれているところで祈り、そして喜んで感謝して御業を行っていく。

「御業をなさしめ給え」

と祈っていく。私はそれが一番いいアドバイスだと思っております。

汝を世に遣わす

次に「世」ということをヨハネの福音書から見ていきたいと思います。17章のところにキリストの最後のお祈りが出てきます。4節から、

「4**我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあらわせり。**5**父よ、まだ世のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。**

この「世」は神さまがお造りになったけれども、これは最後のものではない。この世から脱出しなければならないという。

「**なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。**」（ヨハネ一2・15）

と、ヨハネの手紙に書いてあります。この「世」というものは神さまがお創りになったにもかかわず、神さまは

「この世に留まってはならない、世から脱出せよ」

という。この「世」は「肉」につながります。そういう次元ですので、これは最終のものではない。そこからもうひとつ上に変貌を遂げなければ、すなわち霊化されなければいけませ

ん。

「人新たに生まれずば。肉から生まれる者は肉なり、霊から生まれる者は霊なり」

という。そこで脱出を遂げなければいけません。その脱出を先ず弟子たちにおいて主はなさろうとした。

6世の中より我に賜いし人々に、われ御名をあらわせり。……9我かれらの為に願う、わが願うは世のためにあらず、汝の我に賜いたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。10我がものは皆なんじの有、なんじの有は我がものなり、我かれらより栄光を受けたり。11今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。……14我は御言を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。15わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、悪より免れさせ給わんことなり。16我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。17真理にて彼らを潔め別ちたまえ、汝の御言は真理なり。18汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らを世に遣せり。

「世のものならぬごとく」といって、脱出せしめながら、しかも「世に遣わす」と仰っている。それはなぜか。世を救わんためなんです。23節を見ますと、

23即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼らをも愛し給うことを、世の知らん為なり。

世が知り、そして世から脱出して、この父の子供になってほしいと。

24父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、世の創の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見んことを。25正しき父よ、げに世は汝を知らず、されど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。26われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり』（ヨハネ17・4～26）

と。「世」というものと、「神さまの御国」というものが非常に対立的な関係にあって、私たちは「世」に属している。世から脱出させられるんですけれども、世から取り去って、御国へ連れて行くとは言っておられない。15節にありますように、

「15わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、悪より免れさせ給わんことなり。」（ヨハネ17・15）

と。むしろ「世に遣わす」と仰った。どういうことかといいますと、イエスさまは、世というものと神さまとが、ある意味では敵対関係にあり、世は神さまのことを知らないというこ

とがわかっているわけです。このままでは、世は滅びに向かう。世の中に閉じこもっていれば、生命はない。

聖霊を受ければ聖霊の分身

ヨハネ伝3章に書いてあるように、ここまで仰っていながら、こういう世でありながら、

「16**それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、**

と、こうくるんですね。だから、この3章などは、後から振り返って読んだ時に物凄くビンビンくる。前から順番に読んでいる時には、

「ああそうですか、そのように世を愛してくださったんですか」

で終るんだけれども、この「世」というものがいかに神さまに敵対し、光がなく闇であるか。そこに居ったのでは死ぬしかないんだということが、終りの方で繰り返し強調されている。最後まで読んで前に戻ってきますと、こんなひどい世を、独子を賜うほどに愛してくださったことが、すごくよくわかるわけです。それはなぜかというと、この御子を世に送ることによって一人も滅びないようにするためでした。「御子を与える」ということは、「聖霊を与える」ということです。御子を与えるということの究極は聖霊を一人ひとりの中に与える。その聖霊がこの世を脱出せしめて、本当に天国人としてくださる。どうしても聖霊を受けてほしいという、そこへ戻っていくわけです。

すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。17神その子を世に遣したまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。19その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。」（ヨハネ3・16～19）

我々は世にありながら、しかも世の者ならずという、こういう矛盾した在り方をさせられているということです。

だから、いろいろ皆さんに嘆きがありましても、それは当たり前だと思っていただきたい。神さまがこういう問題だらけの世に我々を遣しておられる。そこに神さまの深い御意があるということです。だから、

「天国が慕わしければ、さっさと首をくくって向こうへ行ったらいい」

かと、そんな勝手なことはゆるされません。地上であなた方には使命がある。この世にあって、しかも悪から免れて、神さまの遣わし給うたお方として、あたかも神さまがイエスさまを遣わして、あれだけの御業をなさったと同じような働きをする使命がある。聖霊をいただいて、その先を行くんだと。イエスさまの先兵として、一人ひとりが蜘蛛の子を散らすように散っていく。そうやって、一人ひとりが神・キリストの分身のような姿で、ペテロやヨハネたちのように、またパウロのように御業を現していく。目立たなくていいですよ。でも、

「本当にあの人は神の人だ」

と、接する人が感ずるような、そういう聖霊の人であれと。

「病める者に手を按(お)けば癒(いや)される」

と、主は約束してくださった。だから、病める者の肩に手を按いて、

「主さま、あなたのお約束ですから、この人を内的に今、癒してください。病気が現象的に癒(い)える癒えないが問題ではありません。この人の内側に、この人に永遠の生命をお与えください。生ける人にしてください。それを止めるような病をぶっこわしてください」

と言って祈る。そして、本当に我々一人ひとりが、キリストの分身になる。聖霊を受ければ聖霊の分身なんです。そして、イエスさまが地上におられた時に絶えず天を慕っておられたように、我々は主イエス・キリストを慕わざるを得ない。その主イエス・キリストはもはや血を流して今も呻いておられるイエスさまではない。

「私は生きている。私は甦って生きている。もうあんな所に私はいないよ」

と。傷痕がありながら、もう光り輝いて、「すべてが終った（成就した）」と言っている。

「喜びがあるよ。平安を与えるよ。私は本当にこの世ならざる平安をあなた方に与えるから。私と一緒に生きておれば、絶対に仆(たお)れることはない」

という。すべてのお約束がイエス・キリストを通して、聖霊によって現実化していく。ご自

分において現実化されないものはまだ「絵に描いた餅」です。「絵に描いた餅」を眺めに集会をしているのではない。皆さんの中に本当に聖霊が宿り給うために集会をもっている。もう聖霊は宿り賜っているという、その現実をいよいよ確かめながら、心を一つにして祈る。

私はペンテコステ特別集会というのは、そのようにして祈る込む集会だと思う。聖書の御言をいわば足掛かりとして、土台として主さまに祈り込む。心を一つにして祈り込む。初期の弟子たちは十日間祈っていましたけれども、私たちはそんなに時間は持てませんけれども、質的にはそのような祈りをもって祈り込む。

「イエス・キリストの名の中へとバプテスマされよ」

「はい、栄光の主さま、あなたという御本尊、あなたの中にバプテスマされます」

と言って自分を――先生は「投げ入れていく」と言われた――イエス・キリストの中に浸(ひた)す、あるいは温泉につかるように、

「あなたの中につからせてください」

と言って祈り入る、そういう集会です。そこから先のことは主さまがなさってくださいます。一番大事なお約束はもう、

「二度とあなたを離れない」

というのが約束なんです。

「この聖霊なる方は永遠に汝と共におらしめ給うべし」

という。

ヨハネ伝をベースにして読む

最後にヨハネ伝14章へもう一度戻ります。12節から、

「12**誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。**

私を受けとる者は私のなす業をなす。いやそれよりも大いなる業をなす。父の御許に行く。そしてそこから聖霊を遣わすからと。

13**汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。**14**何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。**

もう私はあなたと一つになって働くからね。そして私は父にお願いした。助け主を与えてくださるように。そのお方は永遠にあなた方と一緒にいてくださるお方だ。これは真理の御霊だ。この方を与えてくれるように私はもうお願いした。そしてその方は来た。ペンテコステで弟子たちに臨んだ。今はあなた方にも随所に随時に臨む。私の名を呼べばもう来ている。「主さま」と呼べば、私は来ている。妨げは何もない。その方は永遠にいてくださると。

17**これは真理の御霊なり、……彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべ**

ければなり。

真理の御霊は、あなた方と一緒にいてくださり、あなた方の中にいてくださる、そういうお方なんだと。このことはもう全部成就していますから。福音書では、「これから」と書いているけれども、我々が読む時には

「すでに成就しました。ありがとうございます。全部今、成就したことを感謝いたします。本当にそうです。あなたが一緒にいてくださり、うちにいてくださり、そして『孤児にはしない。お前の中に来るからね』という約束どおり、本当に来てくださいました。ありがとうございます。全部成就しました」

と。そして、

19**……われ活くれば汝らも活くべければなり。**

私が生きるのであなた方も生きるんだと言ってくださっている。そして、

20**その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。**

私は父におり、あなた方は私の中におり、そして私はあなた方の中にいるということがはっきりと分かるよ、体で感じとられるよと、そんなお気持ちですね。そして、26節、

26**助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。**

助け主すなわちわが名によりて父の遣わしたもうた聖霊はあなた方にすべてのことを教えてくださった。これからも教えてくださるよと。

だから、この聖霊が福音書に書いてあることを我々に分からせてくださるんです。聖霊に導かれて福音書を読むことが大事です。聖霊の中で福音書を読みますと、日毎に放つ光が変ってきて当たり前です。その日その日、違う光が発せられて当たり前なんです。

「昨日はこの御言が物凄く心に響いたよ、今日はこの御言だったよ」

と。この福音書の中のキリストの言、御業、それは全部、祈りの中で開いていきます時に、日によって全部違う働きをしてくださるのが当たり前です。大事なのはイエス・キリストご自身があなた方お一人お一人の中で御業をなさってくださるということです。そのいわば手助けに御言をちょこちょこくださる。

「あなたが今、思っていることは、福音書でいえばここに当るんだよ。福音書にこう書いてあるだろ。それが今、あなたにおいて成就しているんだよ」

と。福音書は実は証拠物件であり、証人なんですよ。福音書が私たちを証(あかし)してくださる。そしてまた、私たちは

「福音書に書いてあることは本当でしたよ」

と言って、証人になるわけです。だから、神さまの側からは、福音書を通して私たちに証をしてくださるし、私たちは私たちの言葉、行動、生活ぶりを通して福音書を証していく。

「なるほどイエスさまはこんな素晴らしいお方であるか」

と。そういう形でこれはグルグル回っていく。これが聖霊をお受けになれば、

「**あなた方は世の終りまで、地の極(はて)までわが証人となるんだよ**」

と仰ったそのお言葉です。そして

「**平安を与える。世が与えるようなものではない。揺るがぬ平安を与える。だから、その中にずっと留まっているんだよ**」

と。まぁキリストのお言葉というのは懇切丁寧で、涙が出るほどありがたい。私は本当にそう思います。

私は聖書を読む時、ヨハネ伝をベースにして読むんです。それから他のマタイ伝とか、その他の福音書を読むと、またそれが迫ってきますしね。それぞれに読み方があると思います。私の場合、やっぱりヨハネ伝がベースです。ヨハネ伝をベースにして、使徒行伝であろうと、ローマ書であろうと、その他のルカ、マルコ、マタイ、みな生き生きと甦ってくださるような気がいたします。そして、何よりも主さまを、

「われ主を目の前に見たり」

と、そういう思いです。姿は見えませんですよ、姿は見えませんけれども、本当に自分に迫ってくださって、語ってくださるようなお方。そして、向こうの世界へ往った時に、

「奥田くん、君はよくやったよ！」

と、こう言われたいですよね。

「お前は見てもおらんくせに、見てきたような顔して話をしてきたね。それでいいんだ。自分は向こうの世界で聴いてうれしかったよ！」

とか言ってくだされば、もう最高ですよね。僕は畏れ多くてもう、

「ははっ、いや勿体なく思います」

と、それしかないでしょうね、きっと。でも、そういうイエスさまの世界というのは実在界ですから、これこそが本当の世界であって、我々の住むこの世は影のようなものです、しばしの地上なんです。この世は過ぎゆく。だから、

「世と世にある物にしがみついたってだめだ。しかし、世にあってあなた方は、わが証人であれよ」

と、この二つをきちっと受けとめて、一日一日を地道に歩んで行くということです。

はい、それでは終りといたします。

祈り

主さま、ありがとうございます。こうして主にある兄弟姉妹たちと二か月振りに再会することができました。このペンテコステ集会をあなたによって導かれ、聖霊のご臨在のうちに御霊・御言一如にいただくことができました。どうぞ、あなたがあの使徒行伝において生き

生きと働かれたように、今、私たちこの土の器を通して、あなたが生き生きと働いてくださいますように。そして、あなたは

「喜びを与える、平安を与える」

と仰ってくださいました。また、御霊は真理の御霊でいらっしゃいます。どうぞ、聖書の御言一つ一つを命づけ、私たちの魂の糧として、また導きの星として、私たちに与え導いてくださいますように、希いたてまつります。

また、聖霊は愛の霊でございます。本当にあなたが私どもを愛してくださったように、私たちは同じあなたの愛の質をもって、兄弟姉妹を愛し執り成し荷い合っていくことができますように。そしてまた、まだあなたのことを知らない多くの人たちが私たちの周りにいます。どうぞ、その方々に対して忍耐強く地道に、そして聖霊の御力によって、御言を語り生命をわかち与えていくことができますように。主さま、我らをお用いください。ここに集っていない兄弟姉妹たちにも、どうぞ等しき恵みを希いたてまつります。病を得ている方の中にも、どうぞ、あなたが慰めとなって臨んでください。

主イエス・キリストの尊き御名にあって、この願いと感謝と祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。